国語（その一）

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

２０１０年代に動画配信サービスが普及して、大量にあるコンテンツを早送りで視聴する人がかなり増えると、タイパを重視する効率主義を問題視する声が大きくなった。２０１０年代末には、ダイジェストで効率よく映画の内容を把握できる「ファスト映画」も流行した。

資本主義を基盤とした消費社会、そして新自由主義化した社会は、私たちを焦らせて消費行動に駆り立てる。作品そのものを味わう以上に、人よりも多くの作品を見終わることが（無意識のうちに）目的化してしまう。だから[A]現代社会に生きる人間は、もはや作品そのものを味わうのが困難になりつつある。

有名な(注1)ルネ・ジラールの「欲望の三角形」によれば、欲望は具体的な対象に向かうのではなく、他者の欲望の模倣であり、対象から欲望がもたらされるのではなく、他者の欲望を真似(ね)するから際限がない。ネオリベラリズムと消費社会においては、こうした欲望のサイクルがいっそう加速する。

フランスの哲学者であるジャン・ボードリヤールは、生存するために必要なものを超えた余剰を享受する「浪費」を肯定し、20世紀以降に現れた新たな「消費」のシステムを真に豊かな社会とはいえないという。モノが溢(あふ)れる消費社会では、それを所有することで他者と比較し、差異を意識するようになり、欠乏感と差異化への欲求を生じさせ、消費活動に駆り立てる。観念や記号を対象とする「消費」には終わりがない。

早送りをして人よりも効率よく情報を取り入れたいという欲望のもとに行われる視聴は、作品それ自体を味わいつくす「浪費」的な視聴ではなく、「その作品を見た」と他者にいうため、ＳＮＳに投稿するため、あるいは流行に取り残されないようについていくための終わりのない「消費」的な視聴である。

映画やドラマを早送りで観(み)る、音楽の間奏を飛ばしてサビだけ聴く、スポーツをダイジェストだけ観戦する、これらに見出(いだ)されるのは「ファスト教養」にも通じる、タイパを重視した「消費」の視聴モードだ。

視聴者の望む状況や環境に適応できる「アダプタブル」な視聴をメディア技術は可能にした。他者との比較を回避できない新自由主義の価値観で動く社会において、テクノロジーの力でいったん効率を手にすると、それを手放すのは簡単ではない。

メディア技術は、その利便性によって無駄と思われるものを排除するように唆す。ユーザーの都合に合わせて作品を操作させ、利己的な(注2)試聴を助長する。コンテンツは人より早く得るべき「情報」に置き換えられ、「消費」の効率化が目指される。

国語（その二）

Bタイパを重視した視聴行為は、作り手の営みをいっさい無視し、作品をコントロールして自らの欲求に見合うようにモノのかたちを思うがままに改変してしまう。こうした娯楽消費は、他者の創作物を支配する利己的な行為であり、そこに利他的な精神はまったく見られない。

X

私の研究室の「映画ゼミ」では、作品をみんなで観て、何が描かれているのか、どういう解釈が可能かをひたすら議論する。受験勉強のように「正解」があるわけではない。作り手の作品を「情報」として消費するのではなく、何度も観直して、いくつもの解釈を重ねる。それは作品を豊かに拡張することであり、作り手の無意識を捉える試みでもある。

２０１０年代後半のトレンドとなった倍速視聴や早送りだが、90年代のビデオデッキにも早送りしながら音声が聞ける機器はあったし、ＤＶＤ時代にも倍速視聴の機能は実装されているものが多かった。

ビデオデッキが家庭に普及していた１９８８年の言説に、テレビアニメをビデオに録画して、わざわざ倍速で観る子供がたくさんいるらしいというものがある。だが、その頃はさして社会問題化されなかった。(注3)室井尚はこの現象に対して当時このように論じていた。

> 倍速でみることによって情報はその姿を変えることになる。彼らがもとめているのはこのC情報の濃密化による変容であって、その通常の意味での味わいとか、ムードなどでもなければ、主体の鏡としての再現＝表象が問題なのでももちろんない。スピードはただ単に効率とか時間の節約にかかわるものではないのだ。そうではなく、この情報の密度の濃密化、その圧縮、その差異化そのものが一種の未知のD恍惚（こうこつ）をもたらすのである。それは子供たちを通常の彼らではないものに変え、かれらの身体と世界とを一変させるのだ。

これはタイパ消費とは根本的に異なる見方である。効率や時短ではなく、テクノロジーによる変容に未知なる恍惚がもたらされること。それが子供たちの身体と世界を一変させるというのである。

タイパ消費は作品を恣意的に変え、自分に最適化させるため、自身が変わることはない。これは作り手に対する利己的な視聴である。それに対して、室井のいうような濃密化による視聴は、作品を別の仕方で味わい直す行為であり、自らも変容することになる。

国語（その三）

デジタル技術による管理の外部に立つことを意識的に実践することによって、もっと日常にランダムネスや偶然性を組み込み、想定外の物事に自らが開かれていく回路を見出していくことが、いまどれほど必要とされているかは論を俟たない。

利他が、それぞれのEポテンシャルを引き出しあって変容していくことならば、予測可能なものに効率よくアクセスすることだけを目指さず、複数の別の回路とそれに反応するアンテナを張っておく必要があるだろう。

繰り返しになるが、インターネットやスマートフォンによる情報へのアクセスは、アルゴリズムによって見たい情報ばかりに行き着いてしまう。「フィルターバブル」の効果で、個人の検索／クリック履歴によってユーザーの好む情報が優先的に表示される。それによって利用者の趣味嗜好に合わない情報から隔絶した情報環境に身を置くことになる。

その点から考えると、たとえば、情報にアクセスする際に新聞はとても重要なオールドメディアだ。普段接することのない情報が大量に入ってきて触発されることがあるかもしれない。いつもは考えないことに思考が転じる契機が訪れる。

日常生活では想像することもない他者に出会う。他者の生を考える回路を作り出す。こうしたきっかけはアナログメディアを意識的に取り込むこと、すなわち環境を作り替えることで生じる。これは子供たちが、予測できない遭遇に満ちた自然のなかで遊ぶことも通ずる。

利便性の高いテクノロジーにより人間が介在しなくてよい管理システムの存在。不快な過程や無駄なやり取り、すなわち途中のプロセスを味わうことを拒む傾向の前景化。社会がこうした方向に突き進んでゆけば、私たちはますます他者を想像する力や他者と協働する力を失っていくだろう。

意識を変えるのは難しいが、テクノロジーの配置＝配列を組み替えることはできなくはない。身近にあるモノやスペース、技術や環境をアレンジすることで、日常空間にランダムネスや偶然性を組み込むことが重要なのである。

（北村匡平『遊びと利他』による）

（注１）ルネ・ジラール　―　フランス出身の文芸批評家（１９２３～２０１５）。
（注２）試聴　―　ここでは、視聴の意味。
（注３）室井尚　―　美学者（１９５５～２０２３）。

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

国語（その四）

問一 傍線部A「現代社会に生きる人間は、もはや作品そのものを味わうのが困難になりつつある」とあるが、それはなぜか。その説明となるよう、次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を、本文中から十五字以上三十字以内で抜き出し、最初の十五字を答えなさい。

現代は［　　］であるから。

問二 傍線部B「タイパを重視した視聴行為」とあるが、これはどのような行為なのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 作り手の営みをいっさい考慮することがなく、自分たちで好きに議論するための材料として観る行為。

② 他者の欲望を模倣し、他者に同化するために、対象そのものではなく、記号を効率的に所有する行為。

③ 流行に取り残されないようにひたすら作品を大量に観ることにより、情報を圧縮し、差異化する行為。

④ 作り手と対話しようとはせず、利己的に作り手の創作物を支配しようとする、きわめて浪費的な行為。

⑤ 作り手の作品を恣意的に作り変えることで、自分に最適化し、作品を情報として消費する行為。

問三 ［　X　］に入る、次の**ア**～**エ**の四つの文の正しい並べ方として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

ア 対して作り手は、語りのテンポをあげ、カット割りを速め、過剰に躍動的な映像で飛ばし見や早送りをさせないようにする。

イ あるのはお互いが他者を支配しようとする利己的な営為であろう。

ウ ここには作り手と受け手の「対話」は見出せない。

エ 動画配信サービスの視聴者には、自らの意のままに操作して、作り手が創り出した表現を味わうことなく、「情報」として他者よりも早く取り込もうとする受け手が多くいる。

① **ウ→ア→イ→エ**　② **ウ→イ→エ→ア**　③ **エ→イ→ウ→ア**

④ **エ→ア→ウ→イ**　⑤ **エ→ア→イ→ウ**

国語（その五）

問四 傍線部**C**「情報の濃密化」とあるが、これによる視聴によって、視聴者はどのようになるのか。五十字以内（句読点なども字数に含む）で答えなさい。

問五 傍線部**D**「恍惚」とあるが、この言葉の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 性質や才能が鍛えあげられること。
② 興奮し、自らを奮い立たせること。
③ かつてない新時代を作り出すこと。
④ 心を奪われて、うっとりすること。
⑤ 感情が盛り上がって緊張すること。

問六 傍線部**E**「ポテンシャル」とあるが、この言葉を漢字四字で言い換えなさい。

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 自分が見たい情報ばかり入手できるインターネットやスマートフォンは、使い勝手の悪いメディアである。
② 効率を求める倍速視聴や早送りは、今に始まったわけではないが、昔は社会問題化されることはなかった。
③ アナログメディアをあえて導入することで、普段接しない情報をつかむ手がかりを持つことが必要である。
④ 現代の映画やドラマは、昔とは違い、作り手の無意識を捉えたり、作品を拡張したりできなくなっている。
⑤ 情報にアクセスすることにかけては、新聞というオールドメディアは、デジタルメディアと遜色がない。

国語（その六）

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

（注1）レヴィナスの「顔」への「応答責任」という考えは、確かに「他者」その人を尊重することを重視するものだが、そこには「呼びかけ」「応答」という言語的なコミュニケーションが前提されているように見える。もし、被援助者が十分な言語能力をもたない場合、その人は「顔」を有さなくなるのか。その人にどのように「応答」すればよいのか。

結論を先に言えば、レヴィナスにおける「応答」は、言葉を用いた返答に限られない。たとえばレヴィナスは、（注2）プラトンの著作のなかに出てくる、議論に参加したくないために首を横に振って拒否を示すだけの登場人物に注目し、そうした身体的な身振りであっても「応答」たりうると述べている。というのも、「応答」において重要なのは、メッセージの内容ではないからだ。むしろそれは、Aコミュニケーションの条件、あるいは他者との関係の条件に関わっている。ふつう、私たちはどのような音声にも「応答」しているわけではない。風のうねりや車のエンジン音やチャイムの音色に対し、「応答」しはしない。空耳で声が聞こえたと錯覚して応えてしまう場合はあるが、そのときにしているのは「応答」というより「反応」だ。これに対し、「他者」の呼びかけに「応答」するということは、その呼びかけを発した者を、単に

イ

に応答しておけば済むような単なる音ではなく、ほかならぬ私が（言語的であれ非言語的であれ）「コミュニケーション」をとることのできる「他者」だと認めることである。つまり、「B対話」を「対話」たらしめるのは、相手を単なる音声の発生源ではなく「対話相手」と認めることだということだ。それゆえ、たとえば意味を有したフレーズを発することができない状況にある人に対しても、その人の顔の動き、目の動き、手の動きなど、どれほど些細な動作であれ、そこに私が「応答」することで「倫理」的な関係は十分に生じうるだろう。

また、もう一つ重要な論点として、レヴィナスがC人間という存在を、単に「対話」のレベルにおいてだけでなく、つねに「身体」を備えた存在と捉えていることがある。従来の哲学では、人間的な主体とは理性を備え合理的な思考やコミュニケーションが可能な主体だとみなされることが多かった。それに対しレヴィナスは、そうした理性的なコミュニケーションに限られない身体的な要素、つまり食事をしたり、①セイショクしたり、傷ついたり、老いていったり、死に晒されたりといった要素を一貫して重視している。これまでの社会福祉学におけるレヴィナス受容ではこの点にあま

国語（その七）

り力点が置かれてこなかったように思われるが、社会福祉が対象とする「他者」が十分な「言語」能力を有さない場合もあることに鑑みれば、こうした身体性の問題はむしろきわめて重要な点となるだろう。

たとえば、レヴィナスの第一の主著と呼ばれる『全体性と無限』では、もちろん「他者」への「応答」こそが、「倫理」的な関係の基盤となると述べられているが、その点が同書の結論なのではない。全体で四部構成をとる同書のなかで、第三部はこうした「他者」との倫理的な関係を主題としているが、それに先立つ第二部では、「他者」はほとんど登場しない。むしろ「自我」が身を置く環境（「境域」とか「元基」と呼ばれる）のなかで、視覚・味覚・触覚といったさまざまな感受性を通じて周りの事物に触れるあり方が描かれている。このことをレヴィナスはD「糧」の「享受」と呼ぶ。「他者」との対話的な関係に入るに先立って、私たちはつねに自分の置かれた環境のなかで、さまざまな要素を自分のなかに取り込みながら存在している。養分としての食べものの②セッシュもそうだし、味わったり匂いを③カいだり、あるいは場所の空気感を察したりすることもそうだ。つまり、人間は場所から切り離されて宙に浮いたように存在しているのではなく、ベッドの上、自宅の寝室、専門的な介護者や家族とともに等々、さまざまな環境との関係のなかで生活を織りなしている。【Ⅰ】その全体が、「享受」という存在様態を形成しているということだ。ここで重要なのは、「他者」への「応答」だけでなく、そうした環境との関わりのなかでその「生」を送っていることもまた、「私」や「他者」のあり方を構成しているということだ。【Ⅱ】

第二の主著と呼ばれる『存在の彼方（かなた）へ』では、このことがさらに「老い」や「傷つきやすさ」といったキーワードとともに語られる。ここでは、『全体性と無限』における周りの環境からさまざまな「糧」を「享受」するという環境的・身体的な存在のあり方のもう一つの側面が強調されていると言える。【Ⅲ】人間存在は身体を備えていることによって、さまざまな外的な要素に晒されながら生きている。時間の流れとともに、自分の意のままにならない要素、自分の自由な意志を行使できない要素が（単に社会的な次元においてではなく）自分の身体の次元でさまざまに生じてくる。動かしにくくなる部分、痛みが増していく部分等々とともに生きていくことが必要になる。【Ⅳ】そうではなく、これらの側面は、そもそも時間の経過から逃れることのできない人間の身体的な生そのもののむしろ構成要素だと考えている。人間の「健康」はめざすべき理念としては重要だろうが、人間の具体的な存在のあり方を観察する現象学の立場からすれば、外部のさまざまな要素に晒され、それを取り込み、「〈同〉のなかの〈他〉」を抱えてい

国語　（その八）

ることのほうが根本的である。【V】このような存在のあり方をレヴィナスは傷つきやすさ（可傷性）と呼ぶ。

先に見たように、レヴィナスの思想は、これまでの哲学（さらには社会福祉学における援助論すらも）が前提としてきた「能動的・理性的・自律的な「自己決定する」能力を有した近代的主体」という考え方を④テンプクさせた点にその特徴を有することはまちがいない。だが、そのテンプクの先にあるのは、単に「他者」に応答する受動的な主体という考えだけではない。理性的で自由な主体のテンプクは、単に「他者」に向かうのみならず、自己であれ他者であれ、身体を備え環境のなかで「享受」しつつ、さまざまな外的要素に晒されて生きる「傷つきやすい」主体としての人間全般に関わっているのである。

（渡名喜庸哲『レヴィナス　顔の向こうに』による）

（注1）レヴィナス　―　フランスの哲学者（1906～1995）。
（注2）プラトン　―　古代ギリシアの哲学者（前427～前347）。

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　傍線部A「コミュニケーションの条件」とあるが、その条件とは何か。その説明となるよう、次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

他者を［　　］。

問三　空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

①　恣意的　　②　所与的　　③　還元的　　④　機械的　　⑤　有機的

問四　傍線部B「対話」のカタカナ語はダイアローグであるが、この言葉の対義語である「独白」をカタカナ語で言い換えなさい。

国語（その九）

問五 傍線部C「人間という存在」とあるが、レヴィナスは『存在の彼方へ』の中で人間の存在をどのように捉えているのか。その説明となるよう、次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

［　　］と捉えている。

問六 傍線部D『糧』の『享受』とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 視覚や聴覚や触覚を通じて他者と関わる人間は、自己と異なる部分を多く持つ他者とともに生きているということ。

② 自分の置かれた環境のなかで生きるしかない人間は、自分の意のままにならない不本意な生を送るということ。

③ 年を取ることで専門的な介護者や家族とともに生活することになる人間は、他者に依存せざるを得ないということ。

④ 能動的、理性的、自律的に自己決定ができない人間は、苦しみや老いなどを甘んじて受け入れるということ。

⑤ 身体を備え、さまざまな環境と関係を持たざるを得ない人間は、自らの制御を超える要素を抱き込むということ。

問七 次の一文を挿入する場所として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

レヴィナスの見立てとしては、身体的な「苦しみ」や「老い」は、「健康」というモデルから離反するがゆえに矯正したり厄介払いしたりすべきものではない。

① 【Ⅰ】　② 【Ⅱ】　③ 【Ⅲ】　④ 【Ⅳ】　⑤ 【Ⅴ】

国語　（その十）

問八　本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 社会福祉が対象とする「他者」は、言語的なコミュニケーションが不可能な、一般的主体とは異なった特殊な存在である。

② これまでの社会福祉学は、身体的な要素を重視することがなかったのだが、レヴィナスを受容したことで変化し始めた。

③ 理性を備えて合理的に思考する主体として、人間を捉えるのと捉えないのとでは、援助のあり方そのものが異なってくる。

④ 人間は生活している場所から切り離して捉えることができないのだから、まず生活している環境を整えなくてはならない。

⑤ 私たちは「他者」との対話的な関係に入ることによって、環境にも意識が向かい始め、外的要素を受け入れるようになる。

国語（その十一）

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

幾何学とは、図形や空間の性質を研究する数学の一分野です。英語では geometry。geo の語源は地理、場所、土地、metry は測る、計測するということ。つまり土地を計測することが、幾何学のもともとの概念です。

（注1）フッサールいわく、「人類は道具の制作プロセスを通して、現実世界には存在しない幾何学を発見したのだ」。さらにその発見によって、Aわれわれ人間はこの幾何学に縛られるようになったのだ、と。どういうことでしょうか。

人類は、さまざまな道具、たとえば石器などをつくるなかで、「ここを削るともっと綺麗な平面になる」と気づくことになりました。そうして、理想的な直線や完全な平面、角や円といった概念が生まれていきます。

たとえば、いまから約三〇〇〇年前、紀元前一〇五〇年頃～九〇〇年頃につくられた原幾何学様式土器があります。ここには完全な円形に近い文様が描かれています。もっと遡ると、七〇万年前の石器にも、対称的なドロップ形をしているものがあります。考古学者によると、手に持った石で左右交互に打って、この形にしていたようなのです。これはもう、他の動物にはほぼ見られない人類特有の行為といえますよね。

［イ］、幾何学に縛られることで、人間は徐々に人間になったとフッサールは考えます。ですが、こうした幾何学図形は「現実には存在しない」ものなのです。古代エジプトの（注2）エウクレイデスが著作『原論』で体系化したユークリッド幾何学の定義によると、点は幅をもたない位置、線はその①シュウセキだとされています。現実世界で幅をもたない点や線を描くことはどうしたって不可能ですから、現実に幾何学図形は存在しないことになる。にもかかわらず、私たちはそれがあたかも存在するかのように、B幾何学の理想的な形を発見します。そして、その理想的な視覚像に私たちの行為が縛られるようになっていくのです。

これは歴史的な話ですが、いまの私たちも幾何学に支配されていると考えられる例はいくつもあります。たとえば、野菜。曲がったものや歪（ゆが）んだものは②キカク外として市場に流通できなくなります。これは制度として決められているからという理由もありますが、私たちもそうした曲がった野菜を買いたがらないでしょう。［甲］を好みがちです。西洋の公園なんかも、丸や四角などを使い、［甲］で整備されています。

現在、ますますこの幾何学図形のような視覚像を、私たちは理想的だと考えるようになっているのではないでしょうか。そして自分の身体をも、ツルツルした幾何学図形の

国語（その十二）

ようにしたいと思っていないでしょうか。

たとえば、c多くの人が脱毛していますね。夏になると、ＳＮＳや電車の中吊り（づ）で「毛の処理、大丈夫ですか？」と煽（あお）る広告を目にすることが増えています。脱毛圧力、ツルツルへの圧力です。

［ロ］、こうした自発的な脱毛が一般社会に広まったのは二〇世紀頃からです。一八世紀までのヨーロッパでは、体毛や髭（ひげ）こそ男らしさの象徴だとして肯定的に受け取られていました。脱毛はもともとアメリカの先住民の習慣で、毛をなくすなんて知能が低いと考えられていたのです。そうした価値観が一九二〇年代以降に変化してゆき、アメリカの女性たちの間で脱毛が盛んに行われるようになります。毛があるほうが身分や知能が低いとみなされるようになる。結果、脱毛は、下層階級や移民の人たちと中産階級とを区別するための手段となりました。脱毛が階級や衛生観念と結びついていくようになっていく。いまでは日本でも、高額なお金をかけて脱毛するのが当たり前になりました。

このように脱毛に励む、いまの人類の理想的な視覚像は、iPhone のようなものなのではないでしょうか。iPhone はツルツルです。でこぼこのない、ＣＧのような見た目・身体が理想とされるようになっていないでしょうか。肌の色むらをなくし、毛穴を消し、顔の非対称性を消していく。現に、生身の人間ではなく、ＣＧで作られた人間が登場するＣＭも出てきました。

七〇～八〇年代は「言語」で理想を語っていましたが、現在は「視覚像」で理想を語る世界になりました。ここでの問題点は、視覚メディアで表現された理想と自分とを重ねていくことです。自分の身体と、ツルツルしたＣＧの身体とのズレに延々と苦しむようになってしまう。

さらに、こういえると思います。「人間は iPhone のような見た目になったほうがよいのだ」というメッセージを超えて、「人間は道具のようになるべきだ」というメッセージが発せられているのではないか、と。

道具は、人間の力だけではできないことを可能にするものです。たとえば、カーナビは、はじめて訪れた地でも迷わず目的地まで私たちを誘導してくれます。運転している人がナビの指示を間違っても、怒らず繰り返し指示をしてくれる。人間だったらd辟易（へきえき）してしまうことにも耐えられる。

ですが少し考えてみると、みなさんは機械と同じようなことを要求されたことはないですか？　さまざまな問題に答えられるようになれ。へこたれてはいけない。自分の能力を絶えず高めていくことが必要だ。こういうメッセージは教育のなかに組み込まれて

国語（その十三）

いますよね。広く人の役に立つことが理想とされるなら、それはiPhoneになることを求められているのと同じです。

ほかにも、「あの人、スペック高いよね」とか「物事を見るときの解像度が高い」といったいい方もコンピュータから転用された表現です。怪我をしたアスリートを「故障者リスト」に入れるのも同様のことです。人間の能力をコンピュータや機械の性能に当てはめようとしている。このように、道具の存在が人間の理想像をつくり変えていくということが起こっています。

では、生物である人間が道具になるとしたら、どのような存在になるのか。道具のような生物、それが家畜です。猫、犬、牛、豚などがそうですね。こうした動物たちと同じように、人間は家畜化しているのではないか、とわたしは考えています。ただし人間の場合は、誰にも飼われていないから、自分で自分を家畜化する方向へと向かいます。これを「自己家畜化」と呼びます。

幾何学に縛られた人間は、iPhoneを理想像として自己を「ツルツル人間」にし、さらには道具、家畜になっていく。みなさんはこのように「人間は道具だ、家畜だ」といわれたら、耐え難い嫌悪感を抱くことでしょう。

しかし考えてほしいのは、なぜそもそも道具や家畜という言葉にネガティブなイメージを抱くのかということです。それは、私たちが道具や家畜をこれまでどのように扱ってきたかということと地続きのはずです。③ブベツ的で暴力的で差別的な、人間のおぞましい行為とその歴史が、家畜や道具という概念やイメージに絡みついているのです。

ＡＩの発展によって、私たちがＡＩのための道具にされてしまう未来もありえるでしょう。そのなかで、私たちが道具や家畜にしてきたことが、自分たちに④ヒルガエって突きつけられている。

（稲垣諭「ツルツル人間、私たちは幾何学の奴隷か？」より）

（注１）フッサール　―　ドイツの哲学者（１８５９～１９３８）。

（注２）エウクレイデス　―　古代エジプトのギリシャ系数学者、天文学者（前３００年頃生存）。英語読みではユークリッド。

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

国語（その十四）

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　傍線部**A**「われわれ人間はこの幾何学に縛られるようになったのだ」とあるが、このことにより、人間はどのようになったのか。その説明となるよう、次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

人間は［　　］ことになった。

問三　空欄**イ**、**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

① しかし　② さらに　③ たとえば　④ つまり　⑤ あるいは

問四　傍線部**B**「幾何学の理想的な形」とあるが、この説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 幾何学の理想的な形など現実には存在していないのに、それを探し求めることに人間は躍起になっていた。

② 幾何学の理想的な形に縛られることによって、人間が人間になるとともに、ツルツルした人間にもなった。

③ 図形や空間の性質を数学的に研究しているうちに、人間は幾何学の理想的な形を発見することになった。

④ 人間はさまざまな道具をつくる中で幾何学の理想的な形を観念的に構築し、それに支配されることになった。

⑤ 幾何学の理想的な形が視覚メディアにより映像化されたため、いままで以上に人間を苦しめるようになった。

問五　空欄**甲**には「対称性」を意味するカタカナが入る。そのカタカナ語を書きなさい。

国語（その十五）

問六 傍線部**C**「多くの人が脱毛していますね」とあるが、一九二〇年代以降のアメリカでは、なぜ脱毛するようになったのか。その説明となるよう、次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を、本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

［　　］と思われないため。

問七 傍線部**D**「辟易」の意味を答えなさい。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 人間は道具や家畜にネガティブなイメージを抱くのは、偏見だったことにいまさらながら気づきはじめた。

② 自分の能力を高めることで、広く社会や人の役に立つ利他的な人間になることは、理想的な生き方である。

③ 人間が道具や家畜に行なってきたぞっとするようなことが、自らの身にふりかかってくる可能性が出てきた。

④ 曲がった野菜や歪んだ野菜が市場で流通できないのは、市場よりも消費者の心理的な問題のほうが大きい。

⑤ アスリートは、コンピュータや機械と同様の性能を持つように、自分の能力を鍛えあげなくてはならない。